

# 本を選ぶ

## 高校図書館版

NO.68 2019年(令和1年)11月20日  
<https://www.las2005.com>

●発行/ライブラリー・アド・サービス  
〒335-0004 埼玉県蕨市中央5-20-1 TEL=048-432-3726

●●●●●ろん・ぼわん●●●●●

### 若い人に読んでほしいK-文学

金承福

毎年幕張で開催されるKCONをご存じですか？音楽やドラマ、コスメなど韓流コンテンツが集まるイベントで、2018年に私たちのブック・カフェ、チェッコリも初出展しました。前年の来場者数が約5万人と聞いた時には半信半疑でしたが、実際に足を運んでみると——その年の来場者数はなんと6万8千人！——韓国のカルチャーに触れたいという若い人の熱気に感激しました。この人たちが韓国文学を読んでくれたらと思わずにいられませんでした。

その後1年半が経ちましたが、この間急速に韓国文学の読者層が若い年代にまで広がったことを、日々チェッコリの店頭でお客さんと接して実感しています。

もちろんK-POPスターの影響もあると思います。「押し」が読んだ本を自分も読みたいというファン心は強いです。エッセイ集『私は私で生きることにした』やYAの『アーモンド』をはじめ、マン・ブッカー国際賞受賞作家ハン・ガンの『少年が来る』まで幅広く手に取っていかれます。そして、次に読む1冊を探しに再度来店してくれるのです。

韓国の作品に共感を抱く若い読者が多い理由に、日本と韓国とで社会の状況が似通ってきていることが挙げられます。閉塞的な社会で生きづらさを感じ

ている彼らにとって、韓国文学で描かれる世界がとてもしリアルだという声もあります。実際に10代の読者からの感想が核心を突いてはとさせられたことも少なくありません。社会的な経験が大人よりも少なくとも、柔軟な心で作品の深いところに触れていると感じます。また、韓国の文壇にも80年代、90年代生まれの作家たちが増えてきました。『フィフティ・ピープル』のチョン・セラン、『ショウコの微笑』のチェ・ウニョン、『惨憺たる光』のペク・スリンなど邦訳が発表されるごとに日本でもファンを増やしています。今後ますます、若い読者がより身近に感じる作品が日本に紹介されていくに違いありません。

コンテンツとしての面白さには自信があるので、若い人たちの心に届くような工夫が何かできないかと考えて生まれたのが、出版社クオンの韓国文学ショートショートシリーズです。冒頭で触れたKCONから生まれたと言っても過言ではありません。気軽に読んでもらえるよう短編「集」ではなく「短編1作」とし、韓国語の原文と訳文もの両方を載せ、朗読音声も公開しています。これからも、はじめの1冊への間口をたくさん用意しながら、いい作品を紹介していきたいと思っています。

文学は読むのに時間が掛かりますが、その分じっくりと人の気持ちを理解できるようになる力を持っていると思います。韓国では日本文学がタイムリーに翻訳出版され、若い人たちの間でも広く読まれています。ぜひ日本でも、これから未来を切り拓く若い人たちに韓国文学を読んでもらいたいと願っています。(キム・スンボク：クオン/チェッコリ)

# ことばが生まれる空間

—本を紹介する文章を書く—

成田 康子

## 書き方は決まっていない

どうやら、生徒たちはどんな本を読むかを指図されたくないという思いが強いようだ、と私が気づいたのは赴任して間もない頃だ。「本、読みませんか、と思わせないように」というフレーズを、その後、図書館（生徒会・外局）活動を紹介するDVDのシナリオに見つけて、やはりそうなのかとあらためて思った。どんな本を読もうと自分の勝手だ、とやかく言われる筋合いはない、という物言いが感じられる。本に限らず、押し付けられることを嫌う傾向が生徒それぞれにある。

それでも、図書館で発行し全校生徒に配布する図書館報「四面書架」には、本を紹介する文章を毎号掲載する方針だから、その書き方に工夫がある。「四面書架」以前の図書館報は、「配った日は教室のゴミ箱がいっぱいになる」と局員が悔しげに話していた。さて、「捨てられない図書館報」はどう作ったらいいのか、それを考えていく必要があった。

「この本は」、で始まり、あらすじがあって、「おもしろかったです」「読んでみてください」、または「～の一冊。」と終わるものをよく目にする。ある生徒に聞いたところによると、<本の紹介文の書き方>というのを中学校の国語の時間に教わった。それを覚えていて書いたのだと言う。とはいえ、あらすじに惹かれるかというところでもないらしい。「あらすじなんてちょっと調べるとわかる」し、「でも、本の紹介文ってそんなもんじゃないんですか?」という反応だ。他の生徒とも直接話してみる。最初は遠慮がちにぼそぼそ言っているが、「へー！ そうなのー」「それって、具体的にどういうこと?」などと訊くうちに、率直な感想や思いが次々と語られ、熱を帯びていく。それがとてもいいのだ。はっ、と思ったことばを逃したくない。書き手自身の気持ちが表れた文章を読みたい、書いてほしいと思った。

## ことばを探して

実際に書く段になって、「やっぱり、この本は、

という書き出しでしか始められない」とか、「あらすじを書かなければその後の文章を続けて書けない」「勧めるんだからおもしろいと書くのが普通じゃないのか」など局員はとまどいを見せる。そこで、「文字数を気にしないで、その本を読んで自分が思ったこと、気になったことや考えたことを全部書いてみたらどうか。流れとしてあらすじも書いていいと思うし」とうながす。おもしろいと思ったのはなぜか、どこがおもしろかったのかを書く。自分が読んで「ここだ」というところはどこなのか。私はここが好きだ、と思い切って書いてみるのだ。

しかし、そう言われても、という表情。クラスの人はどう思われるかの不安、「自分」を人に見せたくない、などの抵抗がある。だからつい、共感を求めるような、ときには迎合にも似た言い回しに落ち着いていき、「読んでみてはいかがでしょう」となるのだろう。

そこで私は思う。ともすると図書館は閉鎖的な空間、という印象がある。図書館員のイメージは暗くて一風変わっていて……局員ってどういう活動をしているのかわからないね、と思われる観がある。ところが実際は、好奇心旺盛で、精神世界を大切にしたいと考えている生徒が多い。だからこそ、自分の内面・気持ちに合ったことばを探し、文章で表現してほしい。自分の殻を破ってみること。文字数の制限にこだわらずに書いてみて、推敲の過程で、言いたいことはおのずと残っていくはずだから。

## 私はどう読んだか

そうこうして少しずつ、いわゆる型どおりの書き方から変わっていった。原稿の最後に署名することも忘れない。

外国文学を紹介する欄（2017年4月発行）より。『カフカ小説全集◎城』池内紀訳／白水社  
“城と名づけたからには、どこかの城での執事たちの争いあたりかと思いきや、全然城が登場しない。

時々、城という単語が出るものの、誰も一向に城に行こうとしない。全てが分からない。もうわからない。悪いがあらすじなんて説明する気にもなれない。まあ少し読めば先が見えるかと希望を持って読み進めても、一段とこんがらかる。カフカは私に近づいて寄り添ってくれないし、かといって背中を向けて知らんぷりする気もなさそうだ。この絶妙な距離感が、ちょうどいい。”(執筆者名)

なんと自然なのだろう。本を読んでいてこんな気持ちになることがある。読みながら「わかるわかる」とうなずいている生徒の姿がある。

試行錯誤を経て、彼らの原稿が変化していく。文章にある自分の考えは大丈夫か、勘違いしていないかと、局内で読み合い質問し合う。「ここいいね」がある一方、「ここって、よくわからないんだけど」という声。自分はそうは思わないという意見が出てくるのも貴重な。「あ、そうか……そうなんだね、わかった」と納得する場面もある。

本<sup>1</sup>(ホンノアイジョウ) 欄(2018年10月発行)より。

「大事なのは」『チャタレー夫人の恋人』D・H・ロレンス著/木村政則訳/光文社

“コニーも、その夫のクリフォードも、不倫相手のメラーズも、町の人、町並みも、みな暗くて煤けている。人間関係も、時代もドロドロしている。男も女もみな男らしさや女らしさを失って、金にとりつかれている。人はみな金の亡者か、そうでなければ厭世家だ。

わいせつであるか、芸術であるか、とかつて問われたことがある。読んでみると、性描写は確かに多い。何度も肌を重ねるシーンがあるうえに、表現も緻密で写実的だ。わいせつ文書と最高裁が認めたのもわからないこともない。原版が出版された時も、かなり問題になったらしい。

しかしながら、性描写を上回るほどに、金の話が多い。産業革命以後の社会で、喜びを見出したコニーたちに比べ、資本家や労働者の姿はあまりにも哀れに描かれている。ロレンスが重要視したのは、決して性の話ではない。資本主義経済の下で金の亡者たちが「生の喜び」を得るための一つ

の答えに、ロレンスは性を引き合いに出した。ただそれだけのことだ。これは世の人に誤解された、悲しい作品だ。”(執筆者名)

読んでもらいたいということが前面に出るのではなく、この本を読んだことがきっかけになって自分はこんなことを考えたのだが、とそれを書いた。すると、教室の隣の席の人、友人・先生など、「読んだよ」と声をかけてくれる人があらわれる。「あなたの言っていること、おもしろい」・「すごく大事なことを書いてあるね」と応えてくれる。相手がぐんと近くなる。

### 読みたくなる気持ち

<読者の声> 2年生の寄稿

「四面書架」に誘われて(2018年4月発行)より  
“(略)……高校入学後、生活に余裕がなくなった自分に、さりげなく、決して押しつけることなく本を勧めてくれる。私にとって「四面書架」はそんな存在です。時々、誘われるように本の世界に足を踏み入れると、悩みも小さく思えてきて、本の計り知れない力を感じることができるようです。/(略)……読むたびに、その感動を誰かと共有したくなって、家族に読んでもらうことがあります。私の父は、「四面書架」を読んで一言つぶやきました。「若いな」と。良し悪しではなく、だそうです。/高校生である今しか書けない文章で、また素敵な本の世界に誘ってくれることを楽しみにしています。”

おそらく、読者は文章の熱に心が動かされるのだと思う。だからと言って、「その本を読まなければならない」、とはならず、自分も何か読んでみたくなるのではないか。熱い心に惹かれるのだ。本を紹介する文章は、その人自身を語っているから、より魅力的なのだろう。書いてあることに共感してもしなくても、自分と違う考えを知ることからでも、本は読みたくなるのだと思う。

そしてもうひとつ、日ごろの生徒とのやりとりをとおして思ったことがある。生徒は、「これいいよ」と言われた本はその人のもののように感じて、だから自分で見つけたくなる、というものらしい。

(なりた やすこ：北海道札幌南高校)

# 世界はおもしろいことであふれている

——新聞と新書を届ける

中山 美由紀

## 新聞は〈地球の日記〉

毎日やってくる新聞に〈地球の日記〉と名づけた教員がいた。朝の通勤途中に買ってくる主要5紙の新聞記事をさっと切り抜き、その日の国語通信に載せて、必ず授業で解説をする。どこかの高校がサッカーやラグビーで優勝すれば、「ひと」の欄で取り上げられる監督の紹介記事を読み比べする。活きた国語の授業をする教員だった。私が新採の時の上司である。(工藤信彦『書く力をつけよう』(岩波ジュニア新書) 岩波書店/1983年)

私がオバマ大統領の広島訪問記事がでている朝刊(2016.5.28)を買いきって大学に行ったのは、おそらくその影響を受けている。黒板にトップの一面だけを貼りだし、気づいたことを言ってもらった。

大見出しは「追悼」「献花」と犠牲者を悼む言葉と「核なき」を強調する平和への志向と2種類あった。写真も被爆者であり原爆投下時広島に居た米兵捕虜の調査をしたという森重昭さんをハグする姿と、原爆ドームを背に演説をする2つのオバマ大統領の姿に分けられた。ここまでは想定内。

小学校図書館でも同じことをした。小六の一人が言った。「日本がでているのは1つだけだね。」確かに、「日」の字は1社のみ。「日米で誓う核なき社会」(東京新聞)そこで写真を比べるとオバマ米大統領と日本の安部首相と2人が原爆ドームを背に同格で写っている写真であった。オバマ氏が主で、安部首相が半分切れて従だった写真が一紙(毎日新聞)、そのほかの演説写真はオバマ氏オンリー。見出しと連動するフォトリテラシーであった。

この記事の一面比較は館内掲示として、フェイスブック仲間を通じて、大学図書館や高校図書館にも広がった。この比較は気づく人は気づく。何よりこの米国大統領広島訪問の話題が印象付けられるだけでもよい。紙の新聞を目にすることがほぼなくなっている若い世代に、チラ見でインプットされるアナログの新聞のよさを味わってもらおう。

そういう空間はもはや図書館にしかないと言っても過言ではない。

限定された紙面にいくつもの話題をパズルのようにはめ込む構成。右上から左下に向かって文章が流れるのが原則。写真・コラムでそれをいざなう。上下にも左右にもすっぱりとは分かれられないのが原則。大見出し、小見出し、リード文でつまみ読みすることもできる。そういう新聞紙面には美学がある、優れたメディアだと大学生には教える。まして、図書館では複数紙の読み比べが容易にできるのである。

「〈地球の日記〉と称してきた新聞は、説明文も意見文も、コラムも文学作品も、文種のすべてが盛り込まれているテキストです。」「新聞という小冊子?の中に、世の中の出来事が。いわば幕の内弁当のように上手に切り取られ詰め込まれている、そういう眼で世界を読み取る術を、生徒諸君に持ってほしかったのです。」(工藤信彦『職業としての「国語」教育 方法的視点から』石風社/2019p26-27) 同じ話題も社が違くと全く違う記事となり、「多様な視点でこの世の中を読むこと」となる。これらはまさに、現在発表されている学習指導要領の国語にも記述のある情報リテラシーの育成だった。40年ほど前の話である。

## 新書を知ろう

大学生の「学習指導と学校図書館」の講義では、探究学習の演習としてA3版1枚を8ページのリーフレット仕立てにするミニレポートを自由テーマで課している。大学生にとって最も困難なのは自分が何に興味関心があるのかわからないというテーマ探しである。

今年は大阪の清教学園がやっている「新書回転寿司」を参考に各自5冊をいろんなジャンルから持ってきて、2分半で回していくハーフ(もとは指導者が選んだ新書10冊を5分で回す)で行ってみたい。自分では絶対選ばない本が手元に来て読んでみ

たいと思ったとか、5冊の中にも専攻の特性や個性が出るとか、中には生まれて初めて新書に触ったという者もいた。世の中、こんなにもいろいろなことが本になっていたと知る驚き。他者の視点から浮き上がってくる自分の興味関心である。新書だから入門編。まずは読んでから探究プロセスに入る。これなら基本情報をしっかり理解して次に進むことができる。探しているテーマの新書を選んで紹介してくれるWebサイト「新書マップ」(<http://shinshomap.info/> 2019.10.14確認)も案内した。新書回転寿司に代わる活動はなにかないか学生たちに問えば、各自の興味関心を語り合うとか、持ち寄る新聞を回して読む（「まわしよみ新聞」というワークショップもあるが、今回は単純に文字

通りの意味）とか、図書館内のブラウジングとかの案が出てきた。（コレクション構築は責任重大だ。）

新書が手ごわいという高校生には、ウォーミングアップに月刊「たくさんのふしぎ」（福音館書店）をつかってはどうだろう。社会科学、自然科学、哲学、芸術、…ありとあらゆる主題を取り上げ、各専門家や実践家が40ページで小学生対象に書いている。ポスターを作って紹介し合う営みは小・中学校で行われている。（「読書ポスター作成」桑田てるみ監修『鍛えよう！読むチカラ 学校図書館で育てる25の方法』明治書院／2012 p 84-85）

高校生が世界はおもしろい！世の中いろいろ！と思える営みを、ぜひ図書館で！

（なかやま みゆき：立教大学）